

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.25

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 読書のすすめ

小林 忠雄
(学術資料部長・未来創造学部教授)

⇒ 第7回 北陸大学読書感想文コンクール
入賞者を表彰

遠藤 愛実
(薬学部 薬学科 3年次生)

⇒ 最優秀賞
貝と羊と中国人の秘密

シヨ インヒ
徐 茵菲
(未来創造学部 未来社会創造学科 4年次生)

⇒ 優秀賞
初心、忘るべからず『白い巨塔』を読んで

ハン イ
範 困
(未来創造学部 未来社会創造学科 3年次生)

⇒ 優秀賞
『おいしいハンバーガーのこわい話』を読んで

武藤 美佳
(未来創造学部 未来文化創造学科 4年次生)

⇒ 優秀賞
悟浄に学ぶ自分探しの方法

辻口 美和
(未来創造学部 未来文化創造学科 4年次生)

⇒ 優秀賞
花火より寂し — 小野小町及び彼女の歌

テイ エン
程 遠
(未来創造学部 未来文化創造学科 3年次生)

⇒ 読書感想文コンクールの審査を終えて—立体的に読む

櫻田 芳樹
(審査委員長・教育能力開発センター教授)

⇒ 審査委員から一言

⇒ 読書コメント大賞表彰

⇒ 年間優秀賞受賞作品

⇒ 目次

HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報



読書のすすめ

学術資料部長・未来創造学部教授 小林 忠雄



私が大学生だった1965年頃は学園紛争の最中で、授業がほとんどなく毎日が休講だった。そこで仕方なくこの機会にと手当たり次第に様々な文庫本を買い、また知人から借りて読書三昧に耽っていた。そのなかで今でも印象に残っている本は、夏目漱石の『夢十夜』や内田百閒『春陽雷光阿房列車』、そして夜を徹し丸二日かけていっきに読み上げた北杜夫の長編小説『楡家の人々』だった。終日、下宿屋の煎餅布団に寝っ転がり、即席ラーメンを啜りながら夢中になって読みつづけ、読み終えた後に今ではストーリーをまったく記憶していないが、あのときの不思議な充実感、達成感だけは記憶の底に深く刻まれている。

また当時は実存主義という哲学というか思想の全盛時代で、フランスのサルトルやドイツのハイデッカー、ヤスパースなどの哲学書が有名で、その翻訳本が数多く書店の店頭には並んでいた。そしてフランスのアルベール・カミュの『異邦人』やチェコのアントニーン・ラフカの『変身』、サルトルの愛人で女性の思想家ボーボワールの『第二の性』なども進歩的と称する学生たちにとってとても人気のあった書物である。

私も当時の流行書なので一通りは読んだが、キリスト教の素養があまり無かったことから西洋哲学そのものの真の理解はなかなか得られなかった。

しかしなかでも特に興味を抱いた本にデンマークの神学思想家であるゼーレン・キルケゴールの代表作『死に至る病』がある。

日本のキリスト教のなかでも明治時代に特にユニークな宗教家として知られた内村鑑三がいるが、彼が提唱した無教会主義は、他のキリスト教教団のある種の教条主義と教団組織の運営に明け暮れた実情から比べると、その純粋な宗教観は多くの知識人を魅了してきた。私も当時、この『内村鑑三信仰著作全集』を少しばかり読んでいたが、なかなか理解が得られず、それよりも大正時代に『出家とその弟子』で有名な倉田百三が示した「慈愛」の心について、それがキルケゴールの「アガペー（慈愛・隣人愛）」の心の思想と同じであることが分かり、いたく感動した覚えがある。

5年前に研究でデンマークのコペンハーゲンを訪れたとき、市の歴史博物館を見学したところ展示室の最後の部屋にキルケゴールのコーナーがあり、もはや相当に忘れかけていた40年前の記憶が沸々と沸いてきて、思わず涙ぐんでしまったことがある。なぜならそこには若くして放蕩三昧に明け暮れ、心の病に苦しんでいたキルケゴールをみごとに立ち直らせたという運命の恋人、レギーネ・オルセンの写真が恭しく飾られていたからである。そして40年前の青春時代に自分は何に憧れ何を夢見ていたのか、小説や映画、哲学思想書に刺激され、なんとなく充たされぬ憧れのヒトへの愛情のはげ口と相俟って虚しく過ぎ去った日々の記憶が重なりあい、とても懐かしかったからである。

学生諸君よ、ほんとうに本を読みたまえ。本は人間の心のエキスであり、魂の源泉である。人は本を読んで決して後悔することはない、むしろ読まなかったことを必ずや一生後悔するにちがいない。

第7回 北陸大学読書感想文コンクール
入賞者を表彰

北陸大学では「人間性」の涵養を重視した精神的基盤に基づいた教育を行っており、健康で感性豊かな人間の育成という観点から「読書、運動、芸術」に力を入れています。

その一環として、昨年度も北陸大学学生を対象にした第7回「北陸大学読書感想文コンクール」を実施しました。44編の応募があり、厳正な審査を行い、以下のとおり入賞作品を選出・表彰しました。

なお、入賞者及び応募者全員に記念品が贈呈されております。次回も多数の応募をお待ちしております。



入賞者と審査委員の皆さん

入賞作品

📖 最優秀賞	貝と羊と中国人の秘密	徐 茵菲	4年	(未)
📖 優秀賞	初心、忘るべからず 『白い巨塔』を読んで 『おいしいハンバーガーのこわい話』を読んで 悟浄に学ぶ自分探しの方法 花火よりも寂しー小野小町及び彼女の歌	範 囲 武藤 美佳 辻口 美和 程 遠	3年 4年 3年 3年	(未) (未) (未) (未)
📖 佳作	『漢語から見える世界と世間』を読んで 『Lesson』を読んで 『君たちの生きる社会』を読んで 『覚悟の人 小栗上野介忠順伝』を読んで 漱石の『こころ』と『心』	屋木 美里 小嶋 優子 倉 慎一郎 寺田 侑加 舟野 麻実	3年 4年 3年 3年 1年	(未) (未) (未) (未) (未)
📖 努力賞	『日本一勝ち続けた男の勝利哲学』を読んで	山田 慧也	4年	(未)

* (未) は未来創造学部、学年は平成19年度。

最優秀賞

貝と羊と中国人の秘密

未来創造学部 未来社会創造学科 4年次生

ジョ
徐 インヒ
茵菲

書名 貝と羊の中国人

著者 加藤 徹

出版社 新潮社

留学生として来日後、いつの頃だったか、「外から中国を見るのは面白い」ということに気づいて、中国を題材にした本を沢山読むようになった。生まれて初めて井戸から出た蛙^{かわず}のように、外の広くカラフルな世界に感動したのだ。私はラッキーな蛙だ。

この「中国再発見」のマイブームの中でも、『貝と羊の中国人』は最も面白い一冊だった。この本は、中国人のタテマエを「羊」、ホンネを「貝」とするユニークな視点から、中国人の性格とその歴史的文化的背景を分析している。素直に、「これ、日本人に読まれたらヤバイぞ!」と感じた。

天安門事件の当時、中国専門家たちが次々にメディアに登場、その後の中国についての見通しを語っていたが、その予想はことごとく外れる。しかし、中国の近未来を正確に予測したのは、著者の指導教授だった。農村演劇の研究を通じて中国社会の深奥を見極めていたのだ。このことから著者は、「躍動する現代中国の表層にばかり目を奪われていると、本質的なものを見落としてしまう」という考えに至る。そして著者は本書の中で、中国人のホンネとタテマエ、人生観と価値観、人口、歴史、地政学から見た中国、という五つの面を通じて、現代中国を分析している。中国の「現代」の表層面を分析するだけでは不十分なのだ。これが、この本を読んで痛感したことだ。

「流浪のノウハウ」という章は、特に印象深かった。

中国には、「私にどこから来たのか聞かないでください。私の故郷は遠方にある。…」という、老若男女誰もが歌える歌がある。その他にも、旅や流浪をうたった詩や歌は数え切れない。中国人は、「かっこよく」流浪する。ある土地に移動し、そこで子孫を残し、数百年定住する中国人は数多い。そして、その子孫たちもまた旅に出て、新天地を作るかもしれない。果てしない流浪の旅が続く。これは、中国人のごく自然な古くからの行動形態だ。その流浪の旅の中に、「中国人の人生哲学が凝縮されている」と著者は語る。

確かにその通りだ。

それは国土が広いという地理的な原因だけではない。

言語学的な証拠として著者は、中国語には「泊まる」と「住む」の区別がない、という例を挙げる。中国語では、あるところに何日か泊まる場合にも、何十年も住みつく場合にも、「住」という言葉を使う。なぜ日本人は、「住む」と「泊まる」とを区別するのだろうか、と中国人は逆に不思議に思う。新しいところに到着し、数日間滞在して終わるか、それとも、一生定住することになるか。未来は誰にも分からない。だから、そんなことは誰も気にしない。「ストップする」という意味のある「住」という言葉を使えばそれですむのではないかと中国人は思うのだというのである。

また、著者は歴史的な証拠もたくさん挙げている。例えば生水や生ものを口にしないという常識や、どこでも手に入れられる食材を使って病気を治す智慧、といった「流浪のノウハウ」を、中国人は代々伝え続けてきた。殷や漢や宋のように、いくつもの王朝が流民の反乱によって滅亡し、新たな王朝が流民によって作られた。さらに、日本には見られない「流浪の英雄」が多数存在することも指摘する。孔子、劉備、孫文、毛沢東…。まさに、旅に出て、旅の厳しさを耐えて、旅から人生経験を積んだ人こそ、中国では英雄になれる、と言えよう。

そして、これは現在の中国政府が外国にいる「華僑」をうまく利用していることとも繋がっている、と著者は考える。

80年代、中国政府は国費で優秀な学生を海外へ送り出し、先進技術を学んで祖国に戻るのを期待していたが、そのほとんどは、帰国せずそのまま海外で生活することになる。私の伯父もその一人だ。当時の中国について伯父が、「知識人を重視していない。給料が低だけでなく、社会的地位も低い。その上、言論の自由もない。」と教えてくれたことがある。そんな状況で生じた頭脳流出は、当然深刻な問題となった。

それでは、中国人は祖国を愛していないのだろうか？それは違う。中国人は、「故郷の月が一番丸い」と思うぐらい、世界のどの国の人よりも故郷を愛している。しかしその反面、もっといい所を見つけたら迷わず行くという「国民性」もある。「中国のユダヤ人」とも言われる温州商人は、何十年も前からアフリカに進出し商売している。彼らにとってアフリカは、大きなマーケットなのだ。一方、研究者たちは競って欧米に行く。そこには、進んだ研究設備や学術環境があるからだ。中国人は、自分の夢を達成するためなら、慣れない所でも、厳しい環境でも、どこへでもその身を投じる。

頭脳流出が問題となれば、他の国なら留学生の出国を厳しく制限するのかもしれないが、中国政府は制限どころか、留学生をどんどん海外へ送った。その裏に「留学生が世界を舞台にして活躍してくれれば、中国人の存在感が高まる」という中国政府の考えがあったからだとして著者は考える。もう中国籍ではなくなった人でも、ヒーローのように扱い、大々的に報じることで、国民に「中国人は優秀だ」という自信を与え、愛国心を育てる。伯父は、帰国する度に地元の大学で講座を開き、最新の科学研究成果を学生たちに教えている。大学や研究機構への寄付も多い。このように、自分なりに国に貢献している華僑は数多い。

この「流浪のノウハウ」、日本人も学んでみてはいかがだろうか。

しかし、学び上手の日本人も、遣唐使の頃はともかく、現代になると中国から学ぶことは少ないように思うかもしれない。欧米主義の反映なのか。それとも、同じアジアではあるが、中国人との間に大きな相違を感じるからなのだろうか。面白いことに、中国人もまさにそう感じている。

しかしそれは、間違っていると思う。著者がまとめた中国人に対する外国人の不満を見てみると、「ものの考え方が主観的過ぎる、理論より感情に走る、うぬぼれが強いくせに劣等感や嫉妬心が強い、長期的・大局的な計画を立てるのが苦手、…ホンネとタテマエが矛盾している、金髪の白人にコンプレックスを持っている」とある。これはまるで日本人への批判に聞こえる、と著者は言う。本当にそうなのかは日本人の判断にゆだねるが、日本人にとって近いようで遠いと感じられる中国も、実はやはり本当に近い国なのかもしれない。

とすれば、日本人と中国人は、学びあい、一緒に強くなれるのではないか。そして、お互いに「冷静な目」と「温かい心」を持ち、同じ人間として一緒に笑い、泣き、怒ることができれば、きっといろいろなところで互いの誤解も解消され、共感できるようになるだろう。私はそう信じている。

最優秀賞を受賞して

徐 茵菲

最優秀賞を受賞して本当に光栄です。北陸大学で留学していた2年間は、連続で読書感想文コンクールに参加させて頂きました。とても成長させてくれました。本を読む楽しみ、考えることの大切さ、沢山のことをここ大好きな図書館で学びました。親切な職員の方々、親切に教えて下さった先生方へ、心から感謝を申し上げます。いつまでもどこに行っても、北陸大学の学生であったことに誇りを持って、頑張っていきたいと思います。

優秀賞

初心、忘るべからず 『白い巨塔』 を読んで

未来創造学部 未来社会創造学科 3年次生 **ハン** **イ**
範 **園**

著者 山崎 豊子

出版社 新潮社



『白い巨塔』。厚くて濃い一冊だ。

やっと、山崎豊子の原作を読むことができた。そのTVドラマは、中国で何回も見ている。見るたび気は滅入るが、何かしら新しく教えられる。広い社会をまだ経験していない自分、もうすぐその社会に飛び込む自分、いったいどんなふうに社会に向き合っていくのか、どんな人生を送るのか。何遍も胸に手を当てて自問してきた。

努力を尽くして進んできた二人、財前五郎と里見悠二。どちらも早く父を亡くし、貧しい少年時代を経て医者となる。両者とも、医学に対して同じく厳格な態度を取り、卓越した技術を誇るようになるのだが、結局この二人は、人生観の相違でまったく対照的な生き方を選択する。

財前は、高校時代、急病に倒れた母親を背負って病院に走りながら“将来患者を救うために立派な医者になろう”と決意する。奨学金を得て浪速医大に入学を果たし、努力と能力の限りを尽くして、願いどおり医者となる。しかし、医学部紛争の中で、自分を見失ってしまうのだ。著者は、その重大なターニング・ポイントに立った財前を、こう描く。「財前五郎は、医学部長室へ向かいながら、あと十数メートル歩き、医学部長室の扉を押したその瞬間に、十六年の歳月をかけ、ここ十か月の間は寝食を忘れ、あらゆる手段を尽くし、狂奔した教授の椅子が、自分の手に握られるか否かが、決まるのだと思うと、息苦しいほどの動悸が、胸を撃ち、足元が纏れた。」彼は、その時いったい何を考えていたのだろうか？

財前が昔めざしていたのは、どうすれば患者を救えるかと常に考える、真の「医者」だったはずだ。教授になれるかどうかで足元もおぼつかなくなっている財前は、もはや昔夢見た「医者」からは程遠く、墮落してしまっている。一步一步、より高いところをめざして登れば登るほど、見えない力によって初心を忘れさせられてしまったのだろうか。十六年の努力の歳月も、結局、教授の椅子に座るためのものでしかなかったのか。

「将来への夢」は、人生の支えとして大事にすべきなのに、どうしてこれほど軽いものになってしまうのだろうか。金銭も名誉も、それ自体が悪いわけではない。どう見るかは、人それぞれに違う。里見も財前も、医学生頃は金や名誉が人生の目的ではなかったはずだ。しかし、この医学部紛争の中で、二人とも金と名誉の問題に直面せざるを得なくなる。迷うことは必ずあるだろう。それは自分の心との戦いだ。自分の初心に従って金や名誉など忘れることにするのか、それとも屈服することを選ぶのか。どちらも辛い。どちらも自分の一生に大きな影響を及ぼすことになる。

里見は、上からの脅威には屈服しなかった。浪速大学で研究を続けられなければ何年もの研究成果が失われかねないというのに、医者ならば患者に責任を負うべきだとして、真実を証言しよう決心する。財前が医者としての命に対する厳格な態度を尽くさなかったため、患者さんを死なせてしまった、という真実を。

こうして二人はすれ違う。真実を証言した里見は、「山陰大学教授へ転任」という医学部部長の鶴飼の報復人事を蹴り、浪速大を去る決意を固める。一方、教授就任を果たした財前は、記者会見で、まるで政治家のような口ぶりで医療過誤訴訟の勝訴を誇り、有力者の診療と学術会議選挙への準備に明け暮れる日々を送る。自分は何のために医者になったのか、忘れ果ててしまっているのだ。

だが、財前は最後に負けてしまう。逆転敗訴してしまうのだ。当然だろう。「優秀」と言われようが、

教授の椅子を確保しようが、医者としてのあるべき態度を失い、命に対して持つべき敬意を失えば、もはや医者の資格はない。

こうしてこの本を読んで、思い出されるのは「初心、忘るべからず」という言葉である。北陸大学留学の前にも「初心、忘るべからず」と言われたことがある。正直なところ、その時には、いったいどういう意味なのか、詳しくは分からなかった。来日後しばらくして、その意味がなんとなく分かってきた。来日当初は、卒業後は大学院に進学して絶対国際弁護士になろう、と固い決意でいたのだが、時々疲れてあきらめたいと思うこともある。しかし、それであきらめて本当にいいのか？もちろん、夢などかなわなくとも、ちゃんとした生活ができるかもしれないが、自分の夢を簡単に捨てるのなら、あるいは何らかの理由で見失うのなら、もともとその夢をもつことも意味がなくなるだろう。人生は、どこまで行っても、時々初心を顧みる必要がある。なぜ、こうして歩いてきたのか？目標は何だったのか？その目標に向かって、一生懸命努力しているか？最初はどれほどの決心で、すばらしい夢を見ていたのか？夢は、決して簡単にあきらめるべきではない。

今回『白い巨塔』を読んで、あらためてそういうことを感じた。これからも繰り返して読んでみたい。また新たな教訓を求めて。

優秀賞を受賞して

範 囲

今回の読書感想文コンクールに参加し、そして優秀賞をもらったことは私にとって本当に深い意味があります。そもそも読書感想文コンクールの目的は、入賞ができるかどうかではなく、自分の表現力と思考力を磨くこと、さらに世の中の美しいものを発見した上で、自分の感性を發揮して他人に適切な言葉で伝えることだと思います。次回も積極的に参加したいと思います。そして本を通じてもっと多くの友達に出会いたいと思います。

平成20年度学術資料委員紹介

小林 忠雄	学術資料部長・読書感想文審査委員	未来創造学部教授
藤井 洋一	学術資料委員会副委員長・紀要編集委員長	薬学部教授
山崎 博久	読書感想文審査委員長	未来創造学部教授
鍛治 聡	読書感想文審査委員	薬学部准教授
轟 里香	紀要編集委員	教育能力開発センター准教授
福山 悠介	読書感想文審査委員	未来創造学部講師
吉田 泰謙	紀要編集委員	未来創造学部講師

※ 読書コメント大賞の審査は、全員で行います。

優秀賞

『おいしいハンバーガーのこわい話』を読んで

未来創造学部 未来文化創造学科 4年次生 武藤 美佳



著者 宇丹 貴代

出版社 草思社

私がこの本に興味を持ったきっかけは、卒業研究にあります。私の卒業研究のテーマは、“国際化する食生活”で、その中でも「ファーストフード」について調べたいと思ったからです。ファーストフードと言えば、誰でもハンバーガーをイメージすると思います。そんな誰でも知っているハンバーガーが、私たち人間にどのような影響を及ぼしているのかを知っている人は、多くはないと思います。ただ、ファーストフードばかり食べてはいけないと思う程度ではないでしょうか。

私は、あまりハンバーガーなどのファーストフードを口にする機会は少ないほうだと思います。実家で生活していることもあり、それらを食べるとしたら、年に3、4回程度だと思います。しかし、一人暮らしをしている友達などは、よくそれを口にし、週に何度か利用する人もいます。

ファーストフードのメリットは、“安い、ある程度おいしい、そして満腹感を感じる”といった点です。しかし、デメリットは、“体に良くない”の一言です。

ファーストフードのメニューのほとんどは、食物繊維が少なく、栄養価が低いっぽうで、塩分、糖分、脂肪分、そしてカロリーまでも高いのです。また、昔のメニューに比べると、ハンバーガーやポテト、ドリンクまでもがビッグサイズ化しているのです。それらを週に何度も食べる人は、“ヘビーユーザーまたはスーパー・ヘビーユーザー”とも呼ばれ、ファーストフード店に頼りきりな人々で、将来は、肥満によって糖尿病や心臓病、肝臓障害の患者として病院にお世話になるのでしょう。

私がこの本を読んで驚かされたことが2つあります。まず1つは、アメリカではファーストフードがいたる所に設置され、なかでも学校にあることです。体に良くないものを教育機関に置くということが、私には理解出来ません。

私が小・中学生の時、毎日お昼には給食が用意され、きちんとカロリー計算されたおいしいご飯を食べていました。小学生から中学生の間は、人間の成長過程で大切な時期です。それにも関わらず、アメリカでそれらを置く背景には、お金が関係しているのです。自治体が教育にかけける費用を減らしたことによって、学校側はお金の工面に困り、それらを設置する代わりに、見返りを貰い、生徒が好むファーストフードを置くことによって、生徒の心を掴んでいるのです。それに加え、体育や保健の授業を削ってまで他の教科に力を入れるあまり、適度な運動をする時間がなくなったのです。それが、今のアメリカの肥満国家を引き起こしている原因であり、それがまた医療費の拡大にも繋がっているのです。これは、“悪循環”の一言につきると思います。

そしてもう1つは、アメリカの大人の約3分の2、子供の約6分の1が、普通より体重が重いか肥満体で、中には胃のバイパス手術をする人がいるということです。私がアメリカに行った時、なんてアメリカは大きいものばかりなのだろうと驚愕させられたことを今でも覚えています。人も家も食べ物もすべてがビッグサイズでした。

なかでもハンバーガーは、日本のハンバーガーとは比べることの出来ないくらいの大きさと量で、私たち日本人では食べることが出来ないのに対し、アメリカ人は普通サイズのように食べきってしまいます。小さいころからそのような生活を送っているアメリカ人が肥満になるのは、自然なことだと思います。

この本によれば、「食べ物の好みが決まるのは子供時代だそうで、最新の研究では、生まれる前から食

べ物の好みが作られているのではないかと」言われているそうです。つまり、お母さんの食べたものの味が子宮の液体に染みこんでいて、それをしょっちゅう飲む赤ちゃんにとって、好む食べ物の味になるのです。ある実験によると、妊娠中または授乳中の母親が人参ジュースを飲んでいると、その赤ちゃんは、他の赤ちゃんより、人参ジュースの味を好む率をはるかに高いそうです。それがハンバーガーだとすれば、赤ちゃんは生まれた時からファーストフードを好み、それを食べるのが当たり前になってしまうのではないのでしょうか。このような結果を踏まえた上で、やはり食生活を改めて見直してみる機会が必要だと言えます。

ファーストフードを食べるのは個人の自由で、そしてそれは自己責任だとファーストフード会社は言います。確かにアメリカ人はよく、「人はみな法の下に平等」だと言います。しかし、実際は飽食社会であるアメリカでは、貧困によってまともに食材も買えず、安くて満腹になるファーストフードばかり食べている人がいます。また、両親が共働きで、簡単に食事がとれるといった理由で食べる人もいるでしょう。そして、それはアメリカだけではなく、日本も含めた世界中で起こっている事実であり、その現実をきちんと受け止め、改善していくことが私たちの健康維持に繋がると思います。そこで大切となってくるのが“食育”だと思います。

北国新聞によると、「食育」とは、「食生活の乱れが子供の成長に悪影響を与えているとの専門家の指摘などを踏まえ、「食」をめぐる問題全般の解決を目指した取り組みであり、単なる食生活の改善にとどまらず、伝統的な地域の特性を生かした食文化の継承なども求められている」ものだそうです。

食育に欠かせないのは、やはり給食だと思います。給食は、毎日違うメニューで、カロリー計算がされた栄養バランスの良い食事です。また、朝食と夕食は、母親の手作りの料理を食べることが一番だと思います。現代社会では、両親が共働きの家庭が多く、母親が専業主婦だという方がめずらしいのかもしれない。しかし、ちょっとした時間に、簡単な料理を作り置きしておくというものでも、ハンバーガーよりはるかに栄養が取れると思います。また、母親に頼ってばかりではなく、時間がある時に、母親に簡単な料理から習い、自分で材料を買って来て料理をすることが、本当の意味での“食育”なのかもしれません。それが、日本の伝統料理を受け継ぐ方法だと思います。

また、最近では地元で採れた野菜やお魚、お肉を使った料理が目立つようになりました。たびたびテレビや新聞で取り上げられ、話題になっています。ここ石川でも加賀野菜などを使った料理があり、私たち県民に親しまれています。このように、日本ならではの料理は、私たちやその次の世代へと受け継がれるべき食文化だと思います。

この本を読んで、改めて“食”というものを考えさせられました。一概にファーストフードを食べてはいけないというのではなく、食べる量や頻度をきちんと考えれば、悪いものとは言えないと思います。また、食生活を通して、家族や友達と一緒に食事を取ることによって、人とのコミュニケーションを図る大切な時間であることを再確認すべきだと思います。私もその中の一人として、今後の食生活を見直していきたいと思います。

優秀賞を受賞して

武藤 美佳

今回、読書感想文コンクールにて優秀賞を頂けたことを嬉しく思います。

読書感想文コンクールは、学生にとって読解力を養えるチャンスであり、また自分の意見を文章にまとめるという文章力を身に付けられる有意義な機会だと思います。事実、私も本を読むことが苦手な方で、何度も本を読み返し、自分の思いを文章にしてみました。

賞を頂けたことによって、もっと本を読みたい、いろいろな視点から物事を考えてみたいという気持ちになりました。今後も、多くの学生がこのようなチャンスを活かして、自分のステップアップに繋がるよう頑張りたいと思います。

優秀賞

悟浄に学ぶ自分探しの方法

未来創造学部 未来文化創造学科 3年次生 辻口 美和



書名 『李陵・弟子・名人伝』

著者 中島 敦

出版社 角川書店

本書の中の『悟浄出世』において、悟浄はひたすら悶々と悩みブツブツ文句を言い「一体自分とはなんなのだろう」と一人、自分探しの旅に出るそのさまは、あたかも現代のOLが会社の有給休暇を使って傷心旅行に旅立つという筋書きに似通うものがある。しかし、現代のOL話の場合では、恋か仕事か、いずれにせよその類の悩みを抱えて自信を無くし、その回復を図る傷心旅行において、ぶらりと立ち寄った先々で出会う人々との心温まるエピソードを胸にOLは立ち直ったりするのだが、悟浄ではそうはいかない。心温まるエピソードなるものがないでもないが、悟浄は別段そんなものが欲しくて旅をしている訳ではなく、唯「一体自分とはなんなのだろう」という問いに対する答えが欲しいのだ。OL話と悟浄の相違点、OLの場合「一体自分とはなんなのだろう」の答えが見つからない時、彼女達は諦める。有給休暇は限られているからだ。だから早々に切り替えて、現地人との思い出を慰めに、明日からまた元気に会社に出勤する——悟浄にはそんな煩瑣なものなどなく、自分が納得するまで旅を続けていられる。けれど遂に悟浄好みの答えを誰も言ってくれなかった。それはそうだ。そもそも他人がああだこうだと勝手に解釈した世界の真理、自己の存在理由などに、悟浄が身を任せられる筈もない。——そうなるには悟浄は、あまりに自我が強すぎる。

大体、自我の強くない者が果たして「俺はばかだ」とか「もうだめだ。俺は」（本書p189より引用）などと言って悩むだろうか。あまつさえ長い年月をかけて自分探しをしたりするなど。悟浄自身がそのことに関して述べている文はないが、著者の『かめれおん日記』にこれと関連した文章がある。「(考えてみれば、元々世界に対して甘い考え方をしていた人間でなければ、厭世観を抱くわけもないし、自惚屋か、自己を甘やかしている人間でなければそう何時も「自己への省察」「自己苛責」を繰り返すわけがない。だから俺みたいに常にこの悪癖に耽るものは、大甘々の自惚屋の見本なのだろう。実際それに違いない。全く、私、私、と、どれだけ私が、えらいんだ。そんなに、しょっちゅう私のことを考へているなんて。)」(中島敦全集Ⅰp393より引用)とある。このようなナルシストの自己憐憫めいた感情を持ちながら、しかしそんな自分を冷静に分析して戒めるという心理が、中島作品中の人物に多く見られる。悟浄もそれに当て嵌まるといって良いだろう。だが“他人”が解釈した、「自己という存在・世界の意味」についてのありがたい教えに自分の全てを任せられない彼も、次々と聖人・賢人の話を聞いている内に「徐々に、目に見えぬ変化が渠のかれの上に働いてきたようである」(本書p222より引用)。それは「いそつぷの話に出て来るお洒落烏」(中島敦全集Ⅰp392より引用)ではなく、彼自身が考えて辿り着いたことだ。「骨折り損を厭わない」(本書p222より引用)と決めた悟浄は、『かめれおん日記』や『狼疾記』の主人公をはじめ、その他中島作品の人物達に多く見られる厭世観・屈折した性格・憂鬱さ等のマイナス部分を払い退け、遂に観世音菩薩の声を聴くに至るのだ。

そこで注目したいのは、観世音菩薩が「身の程知らずの悟浄よ」(本書p226より引用)と言って説教を始めるのだが、この場面と『狼疾記』の、おそらくは三蔵宛に届いた手紙の内容だろうか、「ふん、まだ三十にもなりもしないのに」(中島敦全集Ⅰp430より引用)と書き始められている、三蔵を戒めるものとも貶しめているものとも知れない文章の、その言わんとすることに共通性が見出せる。悟浄と三蔵を傍から見た観世音菩薩と手紙の送り主は、二人に何を見たのか。二人の、ひいては中島敦の(のち悟浄が

脱した) 悩みに、手紙の主ははっきりとした答えを述べていないが、「過ぎたるは猶及ばざるが如し」との孔子の説いた中庸道にもそうあるように、観世音菩薩は「身の程を知れ」と言っている。「形而上学的といつていい様な不安」(中島敦全集 I p414より引用)を抱える三蔵にどこか通じるものがある悟浄に、「世界は概観によるときは無意味のごとくなれども、その細部に直接働きかけるときはじめて無限の意味を持つのだ」(本書p227より引用)と観世音菩薩は諭す。果たしてそれは悟浄にとって(或いは悟浄と似通う部分がある三蔵、その他の中島作品中の人物達に対して)の明確な解決法ではないのだが、(現にそう言われた時の悟浄は何が何だか、夢か現実かも分からない風にぼかんとしている。)彼は自分なりの解釈で「そういうことが起こりそうな者に、そういうことが起こり、そういうことが起こりそうな時に、そういうことが起こるんだ」(本書p228より引用)と自分を納得させて、現実味を帯びないまま終わった菩薩の降臨を信じてみようという気になり——そしてまさに、それは正しかったといえる。

『悟浄出世』はそこで、別段「信じるものは救われる」などという聞こえのいいことを言いたい訳ではなく、唯、身の程を知り、己の性情にどう向き合うか、どう対処していくかで悟浄のように前に進むかどうかが決まると、そして無闇矢鱈と自己を正当化するのではなく、「いそつぷのお洒落鳥」にならない為には、骨折り損覚悟で自分探しの旅に出てみるのも手である、ということを示しているのである。

優秀賞を受賞して

辻口 美和

今回このような賞をいただけてとても光栄に思います。このコンクールでは本に触れる機会を作るだけでなく、本を読んで感じた自分の素直な考えを書き表すことで自分を表現する機会が与えられることが魅力だと思います。豊かな感性を養い、多くの知識に触れることは、大学生活だけでなく人生を楽しむためにも必要なことだと思うので、そのためにも多くの学生の皆さんに読書の楽しさを知っていただきたいと思います。



優秀賞

花火より寂し — 小野小町及び彼女の歌

未来創造学部 未来文化創造学科 3年次生 テイ程 エン遠

書名 『新日本古典文学大系5 古今和歌集』

出版社 岩波書店

中国の女詞人の李清照に「應是緑肥紅瘦」（まさにこれ緑肥えて紅瘦すべし）という名句がある。緑の葉が茂っても、しよせん紅の花の嬌艶きょうえんと抜群を隠すことはできない。星のように数え切れない「古今和歌集」の歌人の中で、彼女の姿はひとときわ注目される存在である。小野小町、一人の独立独歩の女子である。

平安朝は風流な文人の息吹に富んでいた時代でありながら、仏教思想の夢幻と虚無にも溢れていた時代である。だから、元々下流社会との接触が少ない貴族たちは、更にこの繁華な世に対して儂いはかな感じを受けた。また、彼らの作品の中にある浮世の悲しさが現れた。「花のいろはうつりにけりないたづらに我が身世に経るながめせしまに」。女性の青春の短さを嘆きながら、小町はまたこの時代の浪漫に対して懐疑の念を示した。だから、女としての小町の歌はとても鮮明である。女性特有の美の気質及び疑い深く複雑な心持は融合し、小町の歌に艶めかしい悲哀を持たせた。

「古今集」の中に収集された小町の歌に恋歌が多いのは、彼女自身が繊細さと複雑な感情を持っている女性だからである。中国の女流文学と違い、絶世の美女と伝えられる小町の恋心は自らあの風流な世に浮かぶ貴族女性の気持ちを表した。李清照の「人黄花より瘦す」と言う清閑寂寞でもなく、魚玄機の「求め易きは価無き宝、得難きは心有る郎」と言う豪放でもなく、朱淑真の「去年の人に見わず、涙は青衫袖を湿す」と言う傷春悲秋でもなく、小町の気持ちは取ったり捨てたりせきばくの矛盾である。男との絆はこの女の一生を貫く幸福と悲哀となった。一方、女の恋に対する憧憬及び相思の苦楽のせいで、小町は愛情を人生の最重要な物として大切にした。愛情生活の哀楽は、彼女の歌を通じて、感情に支配された女性の姿を表した。「いとせめて恋しき時はうばたまの夜の衣をかえしてぞ着る」のような夢に関する纏綿てんめん的な歌は小町の作品に多く、美しい恋心の後の愛情への執着が隠れている。一方、小町はまたこの男女の愛に不信を持っていた。あの男女の付き合いは妖艶ようえんに近い時代、変わり易い男性の心に、小町はずっと不安定さを感じていた。「色見えでうつろうものは世の中の人の心の花にぞありける」のような歌の中で、小町は女としての多情と敏感な心によって人心の無常を嘆き、この変わり易さを昇華し、愛情そのものを不安定と認めた。それに、仏教的な虚しい处世態度も、小町に恋を哲学的な観点からも思いめぐらせしめた。こうして、愛情と言う物は同時に一番の感情的な欲求及び変わり易く無意義なものとして存在している。だから、小町の歌には、情熱と冷静、希望とあきらめ、喜びと悲しみ、感情的な沈淪ちんりんと哲学的な超脱が混在し、矛盾していても、真実な女性像が生き生きと表現された。

中国文学の社会性と家族性に比べれば、日本の古典文学の個人性は非常に濃いと言える。『枕草子』、『方丈記』から『伊勢物語』、『源氏物語』まで、全ては作者の個人的な感情が賦与された心理の釈明と言える。だから、文中に反映された作者の姿は非常に清楚である。前に言った通り、小町の歌は愛情に対する矛盾した態度から発展し、社会と人生に対する懐疑を示した作品である。日本の古典の中には、美への執着がある。紫式部が築いたのは完璧な意中の男性、清少納言が描いたのは最も理想的な生活、ただ小野小町のみ人生の意義—愛情に支配された女としての自分を表した。だから、小町は女流文学の中の美妙な存在である。彼女の作品に反映される愛情の美麗と平安朝の浪漫は女性の幻想と現世の虚無感を含んでいて、小町の個人的な世界と言える。非常に繊細な筆致で支えられた表現はこのように重い感情が強い感染力を持っており、千年後の私たちにもその感情を如実に感じさせる。

小町の一生には光彩と美貌ぶりが伝えられていても、後世に一枚の実像も残っていない。それに、日本各地に流れている伝奇の中で、この絶世の美女はいつも美の短さ、愛の変わり易さ及び人生の無常を訴えている。でも、彼女の歌より彼女をよく解明するものはなかろう。古典は本当に不思議なものである。薄い紙の中で、言い切れない奇妙なものがある。後人は彼女の歌風を「清純、情熱、哀婉、繊麗でありながら、なよやかな王朝浪漫性を漂わせている」と絶賛した（元々古今集仮名序の中で紀貫之が言った古典文で、こちらはwikipediaの現代語訳文を直接に引用した）。だが、彼女の歌を讃嘆する時、彼女の切ない心を深く理解できる人は何人いるであろう。しょせん人と人との間を隔てるのは時間でもなく場所でもなく、心の距離だけである。花火は一瞬の絢爛の後、無限の落莫に沈み込んだ。千年後の今、薄い紙を越えて、見えたのは花火より寂しい姿だけである。小町も、あの時代も。

優秀賞を受賞して

程 遠

日本で漢学を勉強するには、日本古典文の修養が不可欠なことに決まっている。この故、ずっと日本古典文学を読んでいる。中国文学の博大精深と違い、日本文学は極まりなく人の心を味わい、自ら繊細優雅、婉曲悲哀という魅力に溢れている。哀れも一種の美と信じている私は、古典に感動させられた時、この文章を書いた。受賞できると思ったことがないのに授賞された私は、意外のあまり喜悅しながら、厳粛な学問態度で無私的に指導して下さいる北陸大の諸先生たちに感謝の意を表さなければいけないと思う。最後に、優秀な伝統を真心を込めて愛する人が多くなることを願っている。

寄贈図書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。
紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書 名	寄 贈 者
前田慶寧と幕末維新	小林 忠雄（未来創造学部教授）
巨匠に教わる絵画の見かた	〃
西洋美術史	〃
金沢検定ドリル300問	〃
金沢七連区民俗誌（DVD）	〃
播磨新宮町史 史料編 II 近現代	小南 浩一（教育能力開発センター准教授）

読書感想文コンクールの審査を終えて—立体的に読む

審査委員長・教育能力開発センター教授 櫻田 芳樹
(平成19年度)

本年の応募作品は40数編と昨年を下回りましたが、最優秀を含む優秀賞5篇と佳作5篇、努力賞1篇を選ぶ事ができました。以下優秀賞5篇について短評を記しておきます。

読書感想文の要件とは、先ず第一に対象の作品の紹介ができていることでしょう。ただその紹介は荒筋を追うだけでは、平板な印象を免れません。そこへ自分の読みがどう関わっているのかを書き記す事が肝要です。それによって対象作品が立体化して読者の前に現れてくるでしょう。徐茵菲さんの取り上げた加藤徹著『貝と羊の中国人』は、我々が中国の人との交際で強く感じる原則（たてまえ）の固さと本音の凶太さを殷周古代文化の特質に遡って跡付けたところに特色があります。「商人」の語源となった殷（商）の文化、と「羊の大」を美とし、神に供える羊を正しき、良きものとする（「義」は羊+我—ノコギリの象形～正しい供え物）周の文化にその淵源をたどっています。この説明が日本人の一般読者にハタと膝を打たせ、この本は一時ベストセラーの一端に連なりました。これを自分の中国体験と結びつけて立体化することが、読める感想文の始まりとなります。ところが日本人が日本人に向けて書いた中国文化論を中国人が取り上げることで、より多層的な見方が生まれています。「日本人に読まれたらヤバイぞ!」というジョークなども効いて来ます。中国の頭脳流出の問題なども身近な叔父さんの例に現実化されます。審査員の票を集めた理由です。

範囲君の「初心、忘るべからず—『白い巨塔』を読んで」は財前の挫折に、初心を忘れた青春の蹉跌を見て、自分の教訓としています。作品世界は財前の初心など揉みくちやにしてしまう医学界の圧倒的現実が描かれているのであって、そこから問題が組み立てられるはずですが、素朴な教訓を引き出すだけではまだ立体化が十分とは言えません。現在の医学界の問題を対照するような大きな視点からの読みが期待されます。

武藤美佳さんの「おいしいハンバーガーのこわい話を読んで」は作品の題名がすでに内容の多くを語っています。「国際化する食生活」に感心を持ち、本書の内容を紹介しながら、給食等による食育の問題や、地産、地消といったスローライフの観点が示されています。さらに国際化する食生活の裏に、低開発国における飢餓の問題が捉えられれば、食糧問題の全体が立体化するはずです。

中島敦といえば、『山月記』を取り上げることが多いのですが、辻口美和さんは『悟浄出世』を取り上げています。『山月記』は高校の教材などにも取られ、虎になった詩人という伝奇性が強く印象に残っていると思いますが、若い人がこの作品に感動を受けるのは、実は「自分探し」の破綻の悲しみを感じているからにほかなりません。その意味で『悟浄出世』も、中島の南洋物『カメレオン日記』も『狼疾記』も同じ系列のものとして読めます。中島敦の諸作品を読み比べることで、必ずしも生前に十全の評価を得たわけではない作家の描く「自分探し」の葛藤が深い共感で捉えられています。

程遠君の「花火より寂し—小野小町と彼女の歌」は作品世界に直接切り込んで自分の小町像を作っているところに感心しました。通常外国の韻文学に親しむ者は、評釈書の手助けを借りるでしょうが、日本古典の数々を原文に取り組んで読んでいく形跡を感じさせます。立論には主観的なところも感じられますが、『枕草子』『方丈記』と読み進めている日本人学生はどれほどいるであろうかと思えます。

優秀賞、佳作の諸篇はいずれも自分なりの立体的な読みと捉え方ができていたと思えます。

審査委員から一言

審査委員
大西 邦治
(教育能力開発センター教授)

読書は基本的には自分のものの見方考え方を鍛える個人の営みです。それを習慣として続けているみなさんは、様々な場でふっと漏らすその言葉の端々に、いつの間にか驚くほど成長したあなたを相手に感じさせていることと思います。あなた自身はそのことに気付いていなくとも、確実に相手はそのことを感じ、あなたを素晴らしい人と評価するでしょう。これからも気になる本を手に取り、日々の読書を続けてください。心に響いた文章をノートに書き留めてください。多くのことを先人の書に学び、さらに自分を鍛えてください。ライブラリーセンターでは密かな個人の営みを支える企画として「読書ノート」を始めました。是非利用してください。「読書コメント大賞」で紹介し、それを読書感想文コンクール応募作まで高めた学生さんもありました。多くの学生さんがライブラリーセンターの企画を利用し、大学生活の中で読書を通じて自分を高めて欲しいと切に思います。

審査委員
大楽 光江
(未来創造学部教授)

今年も力作が集まりました。時間も距離も飛び越えて対話できるのが、読書の醍醐味。一千年も昔に紫式部が書き残してくれた大長編ラブ・ストーリー『源氏物語』は、いまでも色あせることなく読み継がれています。「どきどきわくわくしながら読む」だけでも楽しい、読書。しかし、読んだあと、もう一度振り返って考えてみることで、その楽しさも、格別です。さらに、感想を誰かと話し合えたりすると、素晴らしい！世界は、それで一挙に何倍にも広がります。活字の世界で、過去の人々と語り合うこと、遠く離れたひととふれあうこと、その無限に広がる楽しみを、感想文を書く作業で一層深めた方たちが、受賞しました。次回は、このコメントを読んでいるあなたも、その楽しさを味わってみましょう！

審査委員
山本 千夏
(薬学部准教授)

今の大学生にとっては、携帯電話は日常生活の中で無くてはならないものとなり、電話でありながら使用時間では会話よりも、インターネットやメールが多くなっているようです。そんな携帯電話が文庫本になる「ケータイ小説」なるものも存在するとか。若者の「活字離れ」、「本離れ」は本当でしょうか？

読書感想文を書くことの第一段階は、まず本を読むこと。次にそこから感じたこと、考えたことなど書き出してみる。最後にそれを自分の意見としてまとめる。自分の個性で……。同じ本を読んでも感想文は読んだ人の数だけ存在し得るはず。

さあ今年度はあなたの切り口で読書感想文を書いてみましょう。

読書コメント大賞表彰

平成19年5月から募集を開始した「読書コメント大賞」には、平成20年1月末までに、全部で90作品の応募があり、2月19日（金）年間優秀賞の表彰が行われました。年間優秀賞・月間優秀賞受賞者は次のとおりです。

〔年間優秀賞〕

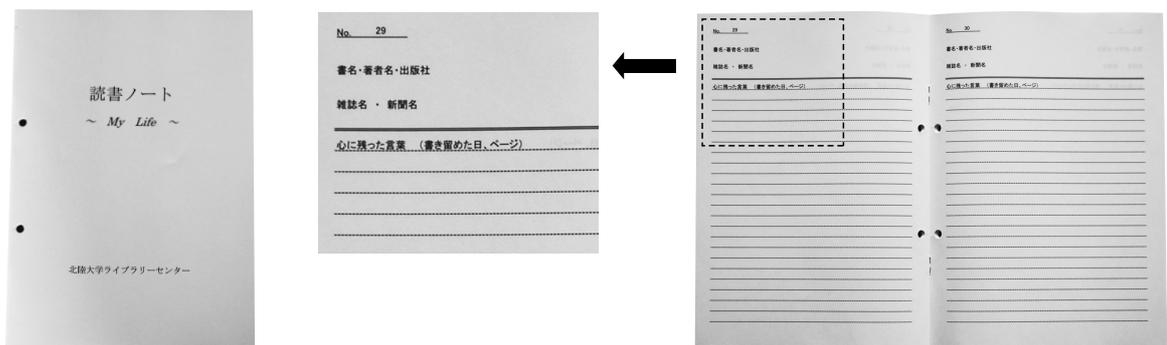
金賞	『風が強く吹いている』	中塚 悠二	薬学部	2年
銀賞	『ホームレス中学生』	徐 茵菲	未来創造学部	4年
〃	『空想法律読本』	劉 樟璠	未来創造学部	3年
銅賞	『ヴェニス商人』	薛 昊	未来創造学部	3年
特別賞		西川 智貴	薬学部	2年
〃		安池賀英子	薬学部	助手

「読書ノート」について

ライブラリーセンターでは、「読書ノート」を作成しました。本や雑誌・新聞などを読んで、心に残った言葉を書き留めるためのノートです。感性を磨き、人間性を高めるための読書を習慣とし、読書コメント大賞や読書感想文への応募などに繋がることを期待します。

「読書ノート」をご希望の方は、ライブラリーセンター（本館または薬学部分館）までお申し出ください。1人につき1冊、無償で配布します。

(※表紙の色は、グリーン・イエロー・ピンク・ブルー・グレーの5種類です。)



編集後記

北陸大学では「読書、運動、芸術」などのリベラルアーツ教育に力を入れており、ライブラリーセンターには人々の創造した叡智が書物等のかたちで数多く所蔵されています。是非、手にとって読んでみてください。そのような学習の中で、読書ノートの活用、読書コメント大賞・読書感想文コンクール応募への参加など、積極的な取組みを期待しています。

(柿木)

CONTENTS

	頁
読書のすすめ	1
第7回北陸大学読書感想文コンクール入賞者を表彰	2
最優秀賞感想文	3
優秀賞感想文	5
読書感想文コンクール審査を終えて	13
審査委員から一言	14
読書コメント大賞表彰	14
「読書ノート」について	16

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.25

平成20年7月7日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
TEL. 076-229-3021
FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印刷：カンダ印刷株式会社